

漢語の精母系子音を表わす契丹小字について

吉池孝一

一

史書によると遼の太祖(耶律阿保機)の代に契丹大字が作られた。920年のことである。その後、太祖の弟(耶律迭剌)により契丹小字が作られた。小字創作の正確な年代は不詳であるが924年もしくは925年との説がある(注1)。現在知られている契丹小字資料のうち遼代1053年「耶律宗教墓誌」が最も古く、金代1170年「博州防禦使墓誌」が下限となる。1191年には契丹文字は廃止される。資料が示すこの117年の間、小字の運用法すなわち正書法ともいべきものに変化があったかどうか、変化があったとするならばどの様な変化であったかということ述べる。

契丹小字の碑文には数多くの漢語語彙が用いられている。契丹小字の構成要素と漢語語彙の音韻を対照することにより小字が表音的な文字であることが分かり、これにより未解読文字であった小字解読の端緒がひらかれたことは周知のことであろう。このような両者の対応のうち、今回は「𐰺」「𐰽」「𐰻」と漢語精母系の子音 ts-,tsh-,s-との関係を調査する。調査に入る前に契丹語の音声につき確認しておかねばならない。清格爾泰(1985)(注2)および聶鴻音(1988)(注3)はともに、契丹語音に摩擦音 s-はあったけれども破擦音 ts-,tsh-は無かったとする。同様の特徴はモンゴル語・ツングース語に広くみられ、契丹語も同系統とみてまず間違いないのであるから、契丹の固有語には破擦音 ts-,tsh-は無かったにちがいない。聶鴻音(1988;p.43)によると遼史「国語解」で漢字表記された契丹の固有語には摩擦音 s-を持つ漢字のみが用いられるという。問題は借用語音として ts-,tsh-のごとき音がどの程度定着していたかということであろう。清格爾泰(1985)は「𐰺」を s-、「𐰽」を ts-と再構し、ts-音の存在を認める。聶鴻音(1988)は「𐰺」と「𐰽」をともに s-とし、「𐰽」を ts-と再構するのは誤りであるとする。両者は見解を異にする。いずれにしても、これから述べるように、「𐰺」と「𐰽」は文字の使用法において区別が認められることは事実であるから、解読作業を進める上で、清格爾泰(1985)のように両者を区別する立場から出発することは是非とも必要である。先ず文字表記の詳細を明らかにし、しかる後に実際にどのように発音されていたかという段階に進まざるを得ない。今は文字表記の詳細を明らかにすべき段階と考える。

二

「𐰺」「𐰽」「𐰻」は漢語音 ts-,tsh-,s-に対応するけれども、以下に挙げる碑文資料によると、その対応の仕方はおおむね三つのパターンをとる。

- ① 1053年「耶律宗教墓誌」(劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民1995,「契丹小字解讀五探」『漢学研究』13-2,pp.313-347.)
- ② 1055年「興宗皇帝哀册[手写本のみ存する]」(清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)

- ③ 1057年「蕭令公墓誌」(清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ④ 1076年「仁懿皇后哀册[手写本のみ存する]」(清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ⑤ 1092年「耶律迪烈墓誌」(盧迎紅・周峰 2000,「契丹小字《耶律迪烈墓志銘》考釈」『民族語文』2000-1.)
- ⑥ 1101年「道宗皇帝哀册」(清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ⑦ 1101年「宣懿皇后哀册」(清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ⑧ 1105年「許王墓誌」(清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ⑨ 1107年「澤州刺史墓誌」(王未想 1999,「契丹小字《澤州刺史墓志》殘石考釋」『民族語文』1999-2,pp.78-81.)
- ⑩ 1115年「故耶律氏銘石」(清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ⑪ 1134年「経略郎君行記」(清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ⑫ 1150年「蕭仲恭墓誌」(清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ⑬ 1170年「博州防禦使墓誌」(劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民 1995,「契丹小字解讀五探」『漢学研究』13-2,pp.313-347.)

一つ目は「𡗗」が ts-,tsh-,s-の三種に対応し、「𡗗」は ts-のみに対応する。「𡗗」は現れない。① 1053年「耶律宗教墓誌」、③ 1057年「蕭令公墓誌」、⑤ 1092年「耶律迪烈墓誌」、⑥ 1101年「道宗皇帝哀册」、⑧ 1105年「許王墓誌」がこれにあたる。これを**第1型**と呼ぶことにする。用例の一端を⑤ 1092年「耶律迪烈墓誌」で示すと以下の通り。「𡗗」で聖宗の「宗」(精母 ts-)、採訪の「採」(清母 tsh-)、相公の「相」(心母 s-)を記す。「𡗗」で節度使の「節」(精母 ts-)を記す。

二つ目は「𡗗」が tsh-,s-の二種に対応し、「𡗗」は ts-のみに対応する。「𡗗」は現れない。⑦ 1101年「宣懿皇后哀册」、⑨ 1107年「澤州刺史墓誌」、⑩ 1115年「故耶律氏銘石」がこれにあたる。重複していた文字の働きに分化が見られる。これを**第2型**と呼ぶことにする。用例の一端を⑦ 1101年「宣懿皇后哀册」で示すと以下の通り。「𡗗」で銀青崇祿大夫の「青」(清母 tsh-)、宣懿の「宣」(心母 s-)を記す。「𡗗」で国子祭酒の「子」「祭」「酒」(精母 ts-)を記す。

三つ目は「𡗗」が s-、「𡗗」が ts-に対応し、新たに「𡗗」が tsh-に対応するようになる。この「𡗗」は沈彙(1980;p.53)(注4)が指摘するように漢語専用字として新たに作られたものであろう。⑫ 1150年「蕭仲恭墓誌」、⑬ 1170年「博州防禦使墓誌」がこれにあたる。このように文字の働きの分化が一層進んだものを**第3型**と呼ぶことにする。用例の一端を⑬ 1170年「博州防禦使墓誌」で示すと以下の通り。「𡗗」で宋国の「宋」(心母 s-)を記す。「𡗗」で將軍の「将」(精母 ts-)を記す。「𡗗」で漆水郡の「漆」(清母 tsh-)を記す。もっとも、⑫ 1150年「蕭仲恭墓誌」では、「𡗗」が ts-,tsh-,s-、「𡗗」は ts-、「𡗗」は tsh-というようにその文字使用は重複している。おそらくは第3型への過渡的な状況を示すものであろう。

三

第1型、第2型、第3型と次第に漢語音の表記が細分化されていく。また資料を年代

順に配した場合、必ずしもきれいに揃う訳ではないが、型の推移と資料の年代の推移は一致する傾向にある。このような型の別が生じた過程を以下のように解釈する。

当初、漢語音 ts-,tsh-,s-の表記には、契丹語音 s-を表記する「𐰺」が用いられた。恐らくは「𐰺」は無かったであろう。今のところこのような初期の状況を示す確実な碑文資料は発見されていないようにおもう(注5)。これを**初期型**と呼んでおくことにする。今後新たに発見されるであろう資料のなかに初期型が見つかることを予想しておく。その後、漢語音の分析の進展と正書法の改善がみられ、先ず tsh-,s-と ts-の二つに分けられる傾向が生じた。tsh-と s-は従来の「𐰺」で表記し、ts-の方は「𐰺」に二点を付加するという変形を加え漢語専用の小字として「𐰺」が作り出された。しばらくの間この「𐰺」と「𐰺」の両者は併用された。これが第1型である。その後「𐰺」と「𐰺」はしだいに使い分けられるようになり tsh-と s-は「𐰺」で、ts-は「𐰺」で表記されるようになった。これが第2型である。その後更に tsh-と s-も細分され、s-は従来の「𐰺」で表記され、tsh-のためには新たな文字「𐰺」が作られた。しばらくの間、三種の契丹小字「𐰺」「𐰺」「𐰺」は併用されたが、最終的に三種の漢語音は、それぞれ「𐰺」s-、「𐰺」ts-、「𐰺」tsh-と表記されるようになった。これが第3型である。

初期型、第1型、第2型、第3型と次第に漢語音 ts-,tsh-,s-の表記が細分化していく。このような型の推移は碑文年代の推移と一致する。したがって、今後、年代不詳の契丹小字資料が発見された場合、型の別を利用して、あるていど年代の目安をつけることができる。これは契丹小字資料を型別に分ける効用の一つである。

四

最後に遼代契丹小字碑文の中で用いられる漢語語彙の全濁声母の音価について触れておかなければならない。契丹小字碑文に現れる漢語全濁音声母の表記にどのような契丹小字が用いられているかを調査してみた。① 1053年「耶律宗教墓誌」には全濁平声字の「秦」が3回現れ「𐰺」で表記される。⑤ 1092年「耶律迪烈墓誌」には全濁平声字の「銭」が1回現れ「𐰺」で表記される。この二つの資料はいずれも第1型(「𐰺」= ts-,tsh-,s- 「𐰺」= ts-)であるから「𐰺」を用いる限り全濁平声字の音価につき有用な情報を得ることはできない。ところが、⑧ 1105年「許王墓誌」は興味深い。全濁上声字の「靜」が1回現れ「𐰺」で表記される。この資料は上記と同様に第1型(「𐰺」= ts-,tsh-,s- 「𐰺」= ts-)である。「靜」は節度使の「節」(精母 ts-)などと共に「𐰺」で表記されるから、全濁上声字「靜」は無声無気音の「節」(精母 ts-)と類似していたか同音であったことがわかる。⑫ 1150年「蕭仲恭墓誌」には全濁平声字の「前」が2回、「曹」が1回現れ「𐰺」で表記される。また「齊」が1回現れ「𐰺」で表記される。この資料は先に第3型としておいたけれども「𐰺」は ts-,tsh-,s-、「𐰺」は ts-、「𐰺」は tsh-というように文字使用の重複が顕著であり第3型への過渡的な資料と位置づけることができる。したがって「𐰺」で表記された全濁平声字「前」「曹」の音価については有用な情報を得ることはできない。しかしながら、全濁平声字の「齊」の方は「𐰺」で表記されているから、全濁声母は平声という声調において無声有気音 tsh-と類似していたか同音であったことがわかる。最後の⑬ 1170年「博州防禦使墓誌」は更に興味深い。全濁平声字の「齊」が1回現れ「𐰺」で表記され、全濁去声字の「字」が1回現れ「𐰺」で表記される。この

資料は第3型(傘=s- 傘=ts- 秀=tsh-)である。「齊」は「漆」(清母tsh-)とともに「秀」で記されるから、全濁声母は平声という声調において無声有気音の「漆」(清母tsh-)と類似していたか同音であったことがわかる。また「字」は「将」(精ts-)とともに「傘」で記されるわけであるから、全濁声母は去声という声調において無声無気音の「将」(精ts-)と類似していたか同音であったことがわかる。

以上を要するに旧全濁声母は声調の違いにより発音し分けられていた。すなわち⑧1105年「許王墓誌」の上声字は無声無気音ts-に近く発音され、⑩1150年「蕭仲恭墓誌」の平声字は無声有気音tsh-に近く発音され、⑬1170年「博州防禦使墓誌」の平声字は無声有気音tsh-に、去声字は無声無気音ts-に近く発音されていた。ごくおおざっぱに言って、旧全濁声母は平声で有気音に近く仄声で無気音に近く発音されたということになる。これは元代の『中原音韻』(1324年序)と一致する。もっとも、117年の間に渡る契丹小字碑文資料に反映した漢語音を同質のものとして処理してよいのかという問題がある。それは今後の課題の一つとして、少なくとも⑬1170年「博州防禦使墓誌」の漢語音の旧全濁声母の状況はその後の『中原音韻』と類似していたと言うことはできよう。このような借用漢語の音韻の検討も、契丹小字の正書法の変遷を確認し、碑文を型別に分けることにより初めて可能となる。

注

- 1) 『遼史』巻64「皇子表」の迭刺の項に、ウイグルの使者に言語や文字を習い、その影響により契丹小字を作ったとある。白鳥庫吉1898(「契丹女真西夏文字考」『史学雑誌』9-11/12。『白鳥庫吉全集 第五巻』東京:岩波書店,1970;pp.45-66 所収による)は天贊三年(924年)及び天贊四年(925年)のウイグルの使者の来貢がそれに当たるとし、契丹小字の製造もこの両年を出ないとする。
- 2) 清格爾泰(1985)『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社。
- 3) 聶鴻音(1988)「論契丹語中漢語借用詞的音系基礎」『民族語文』1988-2,pp.41-49。
- 4) 沈 彙(1980)「論契丹小字的創製與解讀—兼論達斡爾族的族源」『中央民族学院学報』1980-4;pp.50-57。
- 5) 「傘」が使用されていない初期の型として②1055年「興宗皇帝哀册[手写本のみ存する]」と④1076年「仁懿皇后哀册[手写本のみ存する]」を挙げることができる。もっともこの2資料には碑石の実物も拓本も存在しない。宣教師L.Kervynが碑石を発見しそれを五日を要して写し取ったという写本が現存するのみである。模写にあたって「傘」と「傘」の僅かな違いを同一視し、すべて「傘」で写し取ったというような場合もあることを考慮しなければならない。